

シニアと児童と一緒に参加する演劇ワークショップの有効性に関する検討

北原靖子*・加藤知佳子**

An Examination Concerning the Effectiveness of Drama Workshops in Which the Elderly and Children Participate

Yasuko KITAHARA, Chikako KATO

要 旨

本研究では、千葉県我孫子市の放課後子供教室で行われた演劇ワークショップの視察および愛知県豊橋市で行われた演劇ワークショップ専門家へのインタビューにもとづいて、シニア（高齢者）と児童と一緒に演劇ワークショップに参加する意義と課題について検討がなされた。

我孫子市の演劇ワークショップでは、イギリスのドラマセラピストがコーディネータとなり、初日は小学生のみで、二日目はシニアと児童と一緒に参加するかたちで行われた。参加者の評定からは、高齢者・児童とも参加を楽しんでいたが、異なる世代同士が出会う「ならでは」の効果を見出すにはまだ課題が残ることが示された。子どもたちはシニアと一緒にだと良い子になりがちで、シニアも子どもに対して遠慮がちな様子が見られた。またシニア対象の事後インタビューからは、子どもとどのように関わればよいのか迷いながら、できるだけ子どもが自主的に動けるよう試行錯誤したとの語りが得られた。豊橋市で演劇ワークショップを指導している専門家へのインタビューにおいては、専門家から、「何をするか」に加えて「場の設定」が非常に大切であるとして、異なる年齢層で構成されるワークショップの課題について具体的な指摘がなされた。

それらをふまえて、演劇ワークショップはシニアが子どもと気負わずに関わるうえでの研修に役立つ可能性があること、また、演劇の発想法は、活動のプログラム上にあるだけでなくそこに参加してもらった場（舞台）の設定・演出の検討に寄与しうることが示唆された。我孫子の事例のように、すでにある場を地域の世代間交流として根付かせるには、活動プログラムの検討に加え、場所や参加者募集のしくみ全体について検討されるべきであることが議論された。

キーワード：演劇ワークショップ、高齢者、児童、世代間交流

*教授 発達心理学

**教授 豊橋創造大学 保健医療学部

はじめに

今日の我が国では、少子化・育児力の低下・教育格差など子どもの育ちを巡る課題が多々あると共に、超高齢化社会を迎え、高齢者の心身健康不安・孤立などへの対策も山積している。社会としては、各世代固有の問題解決を目指すだけでなく、相互の対策事業が乗り入れて連携しながら課題解決に取り組む手立てが求められる。連携ができる地域コミュニティの根幹をなすのが世代間の相互理解であり、それは世代間の交流を通して培われる。アメリカでは1960年代から社会問題の解決に世代間交流が重要であると認識されて政策的にも対応が進み、さまざまな理論をベースに多様なプログラムが展開されて今日に至っている（Newman, 1997）。

アメリカと比べれば認識が遅れていた我が国でも世代間交流や連帯を促進する試みが進みつつあり、ことに地域の世代間交流のベースとして学校を活用する流れは、日本独自の展開例として着目されている（中川, 2001）。たとえば今日では、多くの小学校に地域のシニア¹たちが参加して、学校の授業参加や宿題実施を支援する学校ボランティアとして、あるいは、総合学習の時間を活用した伝統文化・職業体験などの講師として、子どもの教育に貢献している。また放課後子ども総合プランに基づき事業展開される放課後子供教室でも、シニアがボランティア参加して遊びを見守ったり、特定の体験機会を用意したりして、子どものまなびを育む活動を行っている（文部科学省・厚生労働省放課後子ども総合プラン連携推進室, 2015）。さらには少子化のため空きができた学校施設の有効活用として、学校に高齢者の福祉や生涯学習の場としての機能をもたせる複合施設化の議論も行われている（文部科学省政策審議会, 2015）。学校をベースとした世代間交流には、いまや交流を通して子どもの学習が進むことに留まらず、どちらの世代も対等にまなびを深めあうことへの期待も含め、これからの時代にふさわしい幅広い展開が期待されているのである。

しかしながら我が国では、まだアメリカのように世代間交流プログラムの開発や効果検証は進んでおらず、学校をベースとした世代間交流では、まずはシニアが学校に参加して子どもになんらかのまなびを与える交流プログラムを中心に、系統的な検討が行われつつある状況である（藤原・西・渡辺・李・井上・吉田・佐久間・呉田・石井・内田・角野・新開, 2006；内田, 2012）。子どもと高齢者を統合的に扱う取り組みに関しては、施設共用などハード面の検討・実践が先行しており、幼老複合ケア施設で両世代への促進効果のエビデンス収集が行われているが、両世代が共に関わって共に楽しめる活動プログラムは不足しており、ソフト面の充実が課題とされている（七北田・上村・岡花・若林・松井, 2007）。小学校をベースに児童と地域住民が関わる場合であれば、幼老複合施設で幼児と施設利用者が関わる場合より一層豊か

な交流展開ができ、相互理解も進むはずだが、そのためにはいったいどのような活動がよいだろうか。

こうした問題意識のもとで、第一筆者は千葉県我孫子市の放課後教室活動に、第二筆者は愛知県豊橋市の芸術劇場活動に関わりながら、児童教育に関心をもつ一部の有識者だけでなく、多くのシニアたちが学校に関わって子どもと共に自らのまなびを深めてゆけるような、魅力ある世代間交流活動プログラムの可能性を探ってきた。その結果として着目に至ったのが「演劇ワークショップ」である。演劇ワークショップは、言葉や行為をやりとりしながら一つの表現を目指すことによって、自己への気づきを深め、異なる他者とコミュニケーションする力を培う活動である（平田・蓮行，2009）。子どもと高齢者という、年齢・経験が大きくかけ離れた「異なる他者」が出会い、互を尊重し認め合う上で、有益なツールとなると期待できよう。また日本における演劇は、これまで学校の授業内で正式に取り扱われてこなかったもので、どちらの世代にとっても等しく「新しいまなび」のチャンスが得られる点でも望ましい。

千葉県我孫子市は、学童保育と一体型運営の放課後子供教室を展開し、地域の人材による体験学習の機会提供を歓迎してきた中で、演劇ワークショップも受け入れた実績がある。これは子ども文化支援 NPO 団体パコモ²が、イギリスからドラマセラピスト Bryn Jones 氏（以下 Bryn 氏³）を招いて行っているものだが、第一筆者が見学した 2014 年夏休みには地域のシニアと児童と一緒に参加する機会があり、双方から良い手応えを得ていた。そこで翌 2015 年の今回は、第一筆者がパコモにお願いして、同じ小学校で児童だけ参加する回とシニアと児童と一緒に参加する回を両方開催いただき、演劇ワークショップの世代間交流にどのような可能性と課題があるか、比較検討を通してより具体的に探ってみようとした。

一方、愛知県豊橋市は、駅に連結して芸術劇場「プラット」⁴を建設し、そこを拠点として文化芸術活動を積極的に推進している中で、「ワークショップ緑日」として複数活動を実施してきた実績がある。そこで表立って世代間交流が目指されるわけではないが、孫と祖父母がワークショップの場に共に居る例も少なくなく、またワークショップを企画する人材育成を行う中でシニアの参加も歓迎されている。個人の意欲と経験に活動を全面的に委ねている我孫子と違って、豊橋には演劇の場所と専門家を備えた拠点を活かして、地域の中に活動を根付かせる手立てが進んでいる。そこで今回は、第二筆者がプラットに関わる演劇の専門家にインタビューへの協力をお願いして、シニアと児童と一緒に参加する活動プログラムや地域のしくみづくりの可能性について意見を伺い、示唆を得るものとした。

両著者は我孫子と豊橋のどちらの現場も足を運び、協力して本研究の調査実施を行った。執筆に際しては本章と我孫子の事例を第一筆者が、豊橋の事例と総合考察を第二筆者が執筆した

が、内容は双方の議論を反映したものである。

【事例1：千葉県我孫子市における演劇ワークショップ】

千葉県我孫子市の放課後子供教室あびっ子クラブ（以下あびっ子）は、現在市内半数以上の小学校に設置され、全校児童の過半数が利用登録している放課後の居場所である。同じ学校敷地内の学童保育児童室と一体運営している地域事情を受けて、あびっ子では学校の宿題や勉強を強制させることはなく、体を動かしたりおもちゃで遊んだりなど、児童主体でのびのび活動させることが尊重されている。その子どもたちの活動を支援する有償ボランティア（あびっ子サポーター）としては、共働きも多い保護者よりも、比較的時間に余裕がある地域のシニアが期待されている。特別な技能があったり特定サークルに所属したりするサポーターの場合は、囲碁将棋、工作、けん玉、習字、読み聞かせ、ショートテニス、ミニゴルフなど、さまざまな体験活動プログラム（チャレンジタイム）を主催している。これらは空き教室や体育館で行われ、プリント等で家庭や児童に予告はしてあるが、こどもに参加を強要することはない。またチャレンジタイムを担当しないサポーターの場合は、子どもたちの自由な活動の見守りをしている。

このあびっ子では、大人が子どもに「何かを教えこむ」一方的な交流は歓迎されないし、通用もしない。低学年が多く縛りもゆるい場であるから、サポーターは子どもの活動を見守る中で問題行動に直面し、対応に困ることもある。チャレンジタイムも、子どもが来てくれなかったり、途中出入りが激しかったりなどして、サポーターはやり方に苦勞する場合も多い。シニアが気軽に参加して子どもと楽しく活動できるような、プログラム開発やボランティア募集参加体制の整備が望まれている（北原・佐藤・蓮見・生駒・川嶋，2015）。したがって、今回のワークショップのように双方向的な世代間交流の新しい活動プログラムを試すには、まさに適当な場であるといえた。

目 的

あびっ子クラブのチャレンジタイムとして演劇ワークショップが実施されるにあたり、児童が参加する回に加えて地域のシニアも児童と一緒に参加する回も設けていただき、以下の検討を通して、演劇ワークショップを通じた世代間交流からどのようなまなびあい期待できるか、その可能性を探るものとした。

- ①シニアと子どもたちは、一緒に参加して活動を楽しむことができるか
- ②異世代で一緒に参加すると、子ども同士とは違うどういったやりとりが生じるか
- ③シニアと子どもたちが一緒に参加するときの課題とは何か

方 法

開催日程

我孫子市立X小学校あびっ子内のチャレンジタイムとして、校内1教室分スペースを用いて、以下2回の演劇ワークショップが行われた。

α ：子どもだけ参加する回（2015年8月Y日）

β ：シニアと子どもと一緒に参加する回（2015年8月Y+1日）

主催者

子ども支援NPOバコモが、イギリスからドラマセラピストBryn氏を招いてワークショップを主催した。Bryn氏と共に日本人通訳1名・NPO代表を含む4名が参加し、Bryn氏のコーディネートのもとでファシリテータを務めた。

児童参加者

当日X小あびっ子に来ていた中で、あびっ子コーディネータの声かけに応じて参加の意思を示した14名（一年二年4・三年四年6・五年六年4, 男子5・女子9）であった。そのうち4名（二年女子・四年女子・四年男子・六年女子）は、 α 回が楽しかったとして翌 β 回にも参加したので、参加延児童数は18（各回9）名であった。

シニア参加者

シニアの参加者は、主催NPO代表の知己の誘いに応じ、調査協力にも同意した4名（男3・女1, 平均69.3（SD6.29）歳）であり、3名は前年度演劇ワークショップに続いての参加であった。 β 回への参加に先立ち、ふだん地域で子どもと関わりがあるか、演劇との関わりはあるか、小学校時代どのように過ごしていたか簡単に記入してもらい、併せて、性格特性を把握する「TIPI-J」7件法10問（小塩・阿部・カトローニ, 2012）、子どもとの関わり姿勢を把握する「ナーチャランス」「幼少期のケア体験」「社会的子育て観」5件法20問（藤後, 2012）に回答してもらった。

それによると、全員が子どもを地域ぐるみで育ててゆくこと（ナーチュランス「地域・肯定」）に積極的で、実際にも地域で子どもと関わりをもっていた。また自分の幼い時について、学校はよい思い出ばかりではないが、地域でのびのび暮らせていた（ナーチュランス「ケア経験」）（図2左）。また、全員が外向性と開放性が標準より高く、積極的な性格であった（図2右）。NPO代表の知己であるB氏は特に演劇との関わりはないが、B氏が声かけした3人は、もともと地域で劇を行うなど、演劇との関わりをもっていた。

表1 参加したシニアの紹介

人物	自由記述質問	回答概要
A氏 70代 男性	<ul style="list-style-type: none"> 地域の子どもの関わり 演劇との関わり 小学生時代 	<ul style="list-style-type: none"> 舞台の子役、小学校図書館交流などでよく関わる。 地域の舞台活動参加。 低学年はバラック、中学年で転校し環境激変で苦勞。
B氏 70代 男性	<ul style="list-style-type: none"> 地域の子どもの関わり 演劇との関わり 小学生時代 	<ul style="list-style-type: none"> 地域の学校支援に、役員としてよく関わる。100人はつきあう。 特になし。 友達と暗くなるまで夢中になって遊んでいた。よく怪我をしたが、楽しい思い出がいっぱい。
C氏 70代 男性	<ul style="list-style-type: none"> 地域の子どもの関わり 演劇との関わり 小学生時代 	<ul style="list-style-type: none"> 小学校絵本読み聞かせなどで、よく関わる。交通見守りもしている。 週1回レッスンに通う。 戦後で先生は厳しかった。高学年で転校、いじめで苦勞。
D氏 60代 女性	<ul style="list-style-type: none"> 地域の子どもの関わり 演劇との関わり 小学生時代 	<ul style="list-style-type: none"> 朗読劇団体代表、学校公演などで時々関わる。 公演活動主催。 家によく友達が遊びに来た。学校開放があったのでよく行った。

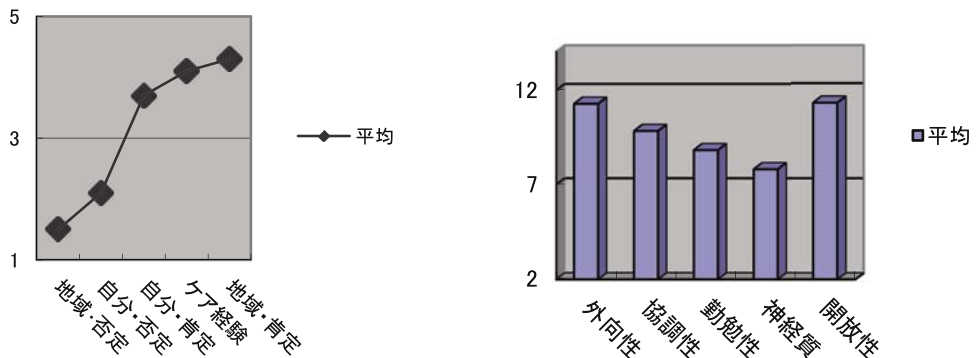


図1 参加したシニアのナーチュランス特性（左）と性格特性（右）の平均

当日のプログラム

参加者は、呼んでもらいたい自分の「名前」をシールに書いて胸につけ、1時間半程度の演劇ワークショップに参加した。活動のメイン・プログラムは、動物を使って子どもの望みや必要を探るとされる「アニマル・アイランド」であった。本プログラムでは、参加者は6～7名程度のグループを構成し、各自動物フィギュアを一つ選んで、大判紙上に描かれた島に置き、そこで暮らす場面を想像し表現してゆく活動が展開された。グループのメンバーはコーディネータの差配のもとで、自分の選んだ動物について説明したり、動物の家や島で生き延びるために必要なものについて相談したり、メンバー間でやりとりしながら、島に川を描き入れるなど、手を加えていった(図2)。

データ収集の手続き

我孫子市子ども支援課とパコモに調査計画書を提出し許諾を得た上、参加者の許可を得て、両著者は $\alpha\beta$ 両活動場面を教室片隅で見せてもらった。また各回の活動場面をビデオカメラ(Panasonic HX-A500)で撮影した。

参加児童には、ワークショップ終了後に参加した感想を教えてほしいと頼み投票箱を示し、外した名前シールを「○：よくわからなかった」「○○：ふつうによかった」「○○○：まあよかった」「○○○○：すごくよかった」の4小窓中1つに入れてもらった。

参加シニアには、感想を児童と同じ4段階で評定してもらったのに加え、その場の心理状態



図2 我孫子で行われた演劇ワークショップの様子(パコモ提供)

を把握する気分調査票 PANAS 改訂版（川人・大塚・甲斐田・中田，2011）20問にも，参加前と後の2度回答してもらった。また，終了後に場所を移し，主催者と共にワークショップのふりかえりを行ってもらい，1時間半にわたりさらに詳しく感想や意見を伺った。その模様はICレコーダー（SONY ICD-UX544F）に録音した。

結 果

参加の様子

本ワークショップに参加した子どもたちは，あびっ子コーディネータの声かけを受けて，隣の学童保育室やあびっ子クラブのメインルームから集まってきた。ことにはじめの α 回では，演劇（ドラマ）をやりたいというよりは，「イギリス人が来る」「英語が聞ける」「勉強ではなくて何か楽しいことがある」と期待してきた様子であった。当初は恥ずかしがったり緊張したりしていたが，輪になって手を叩いたり，ペアを組んで相手の動作をミラーリングしたりなど，Bryn氏のもとで身体ゲームに楽しく参加してゆくうちに，すぐになじんでいった。

子どもだけの回 α も，主催団体の大人が子どもたち3～4人に対し1人入って一緒に活動した。主プログラム「アニマル・アイランド」では，メンバーが一人ずつ話をする機会が何回かあったが，大人の見守りもあって，低学年も順番を守ったり人の話を聞いたりできていた。ただし，考えたことをことばに出す，たとえば，自分が選んだ動物の名前と動物の好きなもの嫌いなものを他メンバーに紹介してゆくときには，かなり時間がかかった。子どもたちだけの回では，そうした場面できちんとひざを揃えて座っていた子どもはごくわずかで，ほとんどは発表するときも含めて背中を丸めていたり，体をゆさぶったり，両手で足をつかんだりなどして，「えっと，，，」「，，，でえ，そいで，，，，」などと話し，よくいえば「リラックスした」，わるくいえば「行儀が悪い」様子であった。また活動が進んで，動物同士が会いに出かけたり，住む家を鉛筆で島に書き込む頃になると，はらばいになって足をぶらつかせながら参加する子どもも複数いた。

一方，シニアと子どもと一緒に参加した回 β では，子どもとシニアでペアを組むことが多かった。子どもたちは正座まではしなかったが，姿勢をぐらつかせたりせず，子ども同士よりは少し「よそいき」な様子であった。また話すときも，よりハキハキして発表的な語り口であった。シニアたちの方は，皆，子どもより一歩分後ろに引いて座り，なにかあったら手助けしてやろうとする控えめな姿勢であった。そして，子どもがすぐに考えつけない時にヒントや助言を与えてやったり，難しいと思ったら率先して自分がやってみせたり，子どもがやる作業を手

伝ってあげたりしていた。そうした手助けがあったときは、子ども側はシニアの助言に素直に従っており、子ども同士と比べるとおとなしくリードに従う様子であった。

参加者の評定

α (児童単独9名)・ β (異世代13名) 参加者の評定値平均は、 α で4件の3.7 (SD1.00), β で3.4 (SD. 65) と、どちらも同程度に高い評価であった ($t(16) = -.804, p > .05$)。児童とシニアの区分や、児童学年層 (低学年・高学年) も評定に特に影響しなかった。

ただし児童評定には認知発達途上の低学年も入っていたことをふまえると、評定の値は量的変数としてより質的変数として扱う方が、妥当性が高いとも考えられる。そこで評定値を「高評価 (4: すごくよかった)」「その他 (1~3)」に区分したところ、 $\alpha\beta$ とも参加した児童4人は、全員がどの回も「4: 高評価」だったが、1回だけ参加したその他児童では、高評価は α で5人中4人に対し β で5人中1人と、 β では少ない傾向となった。その結果、二分割で評定すると、評価割合は回によって有意に異なり、 β の方で高評価が少ないことになった ($\chi^2(1) = 4.197, p < .05$)。

一方シニアの β 評定でも、高評価は4人中1人に留まった。また気分調査票によれば、シニ

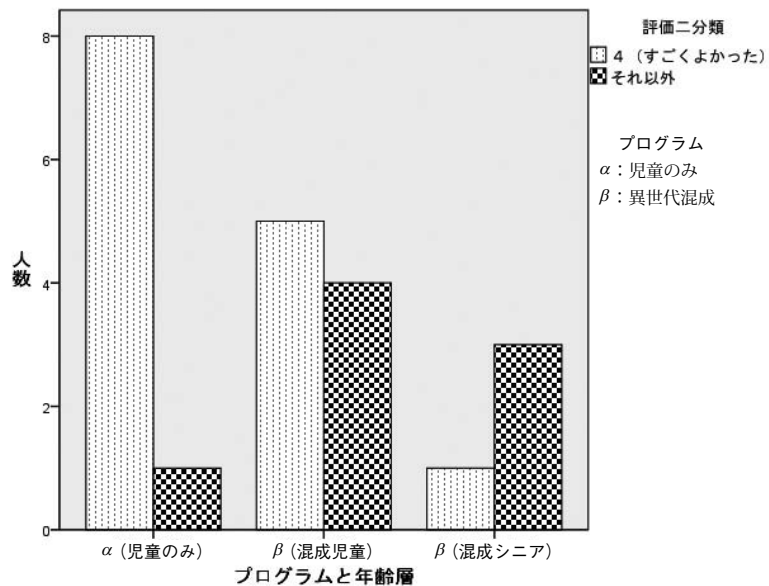


図3 回別・年齢層別に見たワークショップ評価

アたちはもともとポジティブな気分に参加し、その状態は保たれていたが、「興奮した」の1項目のみ、事前の7段階評定3.3から1.5ポイント向上した ($t(3) = -5.196, p < .05$)。

以上を通覧すると、演劇ワークショップはどちらの世代にも好評であったが、しかし、児童とシニアと一緒に参加したことで魅力が増したとは、まだいえない結果であった(図3)。

ワークショップ終了後のふりかえり

ワークショップ終了後、場所を移し主催者も招いて行われた1時間あまりのふりかえりでは、シニア各位と主催者の間で積極的なやりとりが行われた。各氏のワークショップに対する感想、子どもへの接し方、やっけて感じた質問、および、それらを受けてのBryn氏と、その夫人で学校教育領域においてドラマを活用しておられる演劇ファシリテータ Jen Camillin氏(以下、Jen氏³)の回答を抜粋し、以下に示した。

ワークショップに参加した感想

A氏：(ペアを組んだミラーリングで) 顔の表情も入れてみたら、子どもから、表情のところの真似をするのがたいへん難しかったですと(笑)、それでも同じ表情をして喜んでみたり握手したりすることは嬉しかったと言われた。そんなお付き合いができて、なごやかになったですね。私にとってもいいです。ふだんほとんど家で人としゃべらないから、お子さんと接すると精神的にも助かる。

B氏：(私は) 地域の教育力を学校に入れるボランティアをしています。相手は中学生なのでですね。今日は小学生で、小学生とこういうかたちで関わるのは非常に楽しい。中学生は、正直言うと距離感がわからない。

C氏：楽しかった、また参加したいです。

D氏：長時間子どもたちが集中しているのがすごい。体を動かしながら人とコンタクトをとると、知らない人とでも心が開けていいですね。

子どもと関わる中でどんなことを意識したか

A氏：小さい子ならそんなことはしないけれど、(今回導入でペアを組んだのが) 4年生くらいの子だなと。劇団でも4年生くらいになるといろいろ自分で発想しますので、こういうことをやったらどうなるかな、というのを考えて、(ペアになってのミラーリングでは) ちょっと物語、あいさつとか、そういうのを少し仕掛けてみた。

C氏：今回は、ある程度子どもに任せちゃった。、(動物の住むところを島の中に描くとき、子どもが) ちまちま描いているんですよ。だから、「もう少し大きく描いたら」って。それから「狼っていうのは日本にいないんだ、外国にいるんだよ」って。あとは、質問事項があれば

しようというときに「わからない」って言うから、じゃ、「年齢言いなさい」と。

(その子どもが) どれくらいやれるのかなと。なるべく本人がやれるように、ほめてやる。そして「やってみたら」と言って、やってみたら「よかったよ」と。だから、相手がやったことに対してはダメだとは言わない。そして伸ばしてゆく,, , 褒め方にもいろいろありまして、サンドイッチ方式といいまして、ほめて、相手の欠点を言って、そしてあとは、一緒にやろうねとって言って。そうすると、人間というのは怒られると頭にくるけど、褒められると喜ぶ。褒めるときにはみんなの前、怒る時には本人の前でやるんです。

D氏：私がペアを組んだのは、たぶん2年生か3年生の女の子だと思うのですが。なかなか、表現するのに時間がかかるので,, , 「この猫の名前何にしようか？」って言うと、「うーーん」って。いろんな名前が出てきているのだと思うのですが、なかなか決められなかったり。それでつい、時間を気にして、「おばちゃんが決めた名前にしていい？」って言ってしまって、自分でいけないなって思って,, , (今回はいろいろな学年が混じっていて) 学年1年でも違うじゃないですが、どちらかという私は待ちたい方なので、余計(気になった)。

ワークショップの趣旨について

A氏：(今後もこうしたワークショップに参加するとしたら) 皆様は(私たちシニアに)何を望んでいるのですか？ たえば、もっと(ファシリテータのように)高いものを求めているのか、それとも、子どもと同一目線の参加でよいのか。それによって我々もやりかたが、ぜんぜん違ってきますよね。

Bryn氏：今回シニアの方々に対しては、ファシリテータではなく、「頼りになる参加者(Helpful Participant)」となってくれることを期待していました。イギリスでいうファシリテータとは、特殊な援助技術と経験をもつ者であって、教師とも異なります。プロとしてのファシリテータは、共感したり、傾聴したり、関わりをもったりする特別な訓練を受けています。Helpful Participantとして、子どもと一緒に目線で遊ぶのでよいのか、それとも子どもをケアする目線で遊ぶのがよいのか、(皆さんは葛藤があったとのことだが)それは大切な質問で、どちらでもよいのです。自分がどんな役割を果たそうとするのか、そう考えること自体が大切です。今回は同じ目線で参加してもらえように行ったつもりだが、参加者の皆さんは、よくケアもしてくれたと感じています。

A氏：では子どもが、これに参加することによって、どういう状態、意識になって、どんな表情になることが理想なのですか？ 子どもに求めるものはあるのですか？ 実践の中で我々が、ああ、こういうものが私たちが求めていたものかな、とわかるような。このワークショップを通して、将来こんなふうにならざるを得ないのだというような,, , 僕は遊びたくて遊んでいた

のだけれど、それが皆さんと同じ方向だったのかは、聞いてみないとわからない。

Bryn氏：参加した子どもへの私の望み（Hope）は、まずワークショップが楽しいという経験をもってもらうことです。楽しかった経験を話したり聞いたりして、自分自身の想像・創造力を育ててほしい。またその表現を他者と共有する楽しさを味わってほしい。何より穏やかで、受容的な感覚の中で、自由であること、リラックスすることを楽しんでほしい。そして最後に、子どもの好奇心をサポートしたいと考えています。…、出会うというのは、もっとも興味深いことです。出会うことで、双方が変わることがあります。たとえば自分が子どもを変えたこともあったかもしれないし、子どもが自分を変えてくれたこともあるだろうし、そういう出会いが大切なのです。

子どもへの接し方について

D氏：こういう研究プログラムの成果があって、どんなことを押さえなくちゃいけないのか（が明らかになって）、子どもと関わる時の接し方を私たちが勉強することで、自信をもって子どもと関われるようになったりできたらいいだろうな、と思いますね。…、今日のプログラムでも、そうですね、たとえばどこまでその子を、待ってあげたいけど待つ時間がないとき、どういうふうに誘導したらいいのかとか。

それとも…、（中略）…、あの、うーん、なんだろう、あまり親が提供しすぎちゃうと、提供するのあたりまえになってきて、子どもが「今日なにしてくれるの？」みたいな。…、じゃなくて、今日何しようとか、自分が主体的に遊べるような、それでなおかつ、なにか創造的なものができるようになってゆくのはなんだろうな、というのは、いつも考えていたので、…。

Jen氏：イギリスの学校では、先生は生徒が自分のアイデアを出せることを信頼しているし、自分の意見を出せるように心がけています。学校の中で、自分でものごとを考えて表現できるように教育しています。生徒が何をしたいかは、そのときそのときの様子をみながら、いちばんよい方法を考えながら行っています。もちろん自信がない子もいますが、できるだけ自信をもてるようにして、押し出して無理をさせるようなことはしません。子どもですから、まず感情が先に出てしまうでしょうが、それに流されるのではなく、コミュニケーションスキルを身に付けるように教育しています。

青年対象の演劇ワークショップについて

B氏：ぜひ中学生、12歳から15歳に関わるワークショップなどあるのか聞いてみたい。実際に学校からニーズとして、地域の人がいろいろ学校施設を活用して生徒や先生と交流するパフォーマンスをやってくれないかという、学校長からの具体的な要請があるので、今のようなワークショップの中学生版があればいいなと。

Jen 氏：中高生だと、フォーラムシアター（Forum Theater）というプログラムがあります。困った問題のあるシチュエーションを無言劇で見て、何をすればよいか一緒に考えるといったような。そのときとても大切なのは、パフォーマーが本当に困っているのを感じてもらうことです（以下、財布をなくして困った人を巡る簡単なフォーラムシアターのデモンストレーション披露）。

イギリスにおける演劇ワークショップについて

Bryn 氏：さまざまな人が集うプロジェクト自体は、文化行事などをはじめ、イギリスでは珍しくありません。自分も数年前には、歴史的建物に隣接した学校で、芸術家（演劇・音楽・美術など）と地域住民が過去・現在・未来を通覧するプロジェクトに参加したことがあります。また高齢者対象のセラピーとしては、認知症を患った人々の支援に用いられています。ドラマセラピーの中では、不満や抑うつなどの否定的な要素もふくめ、多様な感情表現が許されます。楽しい余暇活動として、ケアプランの中に組み込まれています。

考 察

調査前の予想では、演劇ワークショップでは各人の思いと表現が尊重されること、また「学校の外」のまなびとして新鮮であることから、世代間交流に有望な活動プログラムとなるだろうとしていた。実際にワークショップの様子を見せてもらい、参加者の声も具体的に収集した今回の結果では、確かにシニアと児童の双方からよい評価を得て、演劇ワークショップの可能性が確認されたといえる。しかし同時に、その持ち味を世代間交流として十分に活かすには、さらに検討が必要なことも明らかになった。

まず挙げられる課題として、世代間交流に適切なプログラムの検討がある。今回行われた「アニマル・アイランド」はもともと自己探求と自己表現の促進を意図したプログラムであり、特に世代間交流を意図したものではなかった。イギリスより自己主張を学ぶ機会も少ないであろう日本の子どもたちにとって、自分の思いをことばで伝える場面が多かった今回のワークはシニアとの力量の差が大きく、どうしてもシニアが手助けしたくなってしまったかもしれない。シニアと子どもたちが「共に楽しむ」という点では、ウォーミングアップとして行われたペアを組んだミラーリングなど身体の動きを用いたワークの方で、年齢が異なる動きの違いがよい意味で興味深く、Bryn 氏が演劇ワークショップに望む「楽しむこと」「出会うこと」ができていたと感じた。その文化、その参加者にふさわしい、世代間が集うならでは体験できるプログラム提案が待たれるといえよう。

また特定のプログラムを作ることとは別に、その「新しい活動の場」をどう受け止めてもらうかも課題である。今回のインタビューからは、シニアたちがプログラムの趣旨（大人に求められる役割、子どもに期待する体験の性質）をシミュレートして適切に対応しようと頑張ったこと、また、その頑張りは葛藤（たとえば、どこまで自分は子どもを待つべきかの模索）を伴うものであったことが明らかになった。今回のシニアは経験豊かで子どもの育ちを大切にする方々であり、また事前の打ち合わせもなかったため、なおさら迷いも大きかったであろう。場面観察によれば子どもの側も、年長者であるシニアに対して安心して頼りにすると共に、良い子を見せようとする気負いもあった様子が伺えた。つまりどちらも力が入りすぎ、日本的に相手の思いを汲み取って譲りあいすぎていたかもしれない。そうになると、仲間内で参加するより楽しさが減っても仕方がない。

「新しい場」でも、今回のようにふりかえりを重ねていけば、おそらく意味がつかめてゆくだろうと思われる。しかし、そこまで誰もが待てるとは限らない。ことに高齢者の場合、自分は何ををするのか、それはできるのか気になる（不安にもなる）人も多くなるので、配慮が必要と思われる（北原・高橋・石川・坂口・土田・吉田，2015）。事前にある程度の理解と賛同を得られないと、参加してはくれないだろう。こうした活動プログラムのブラッシュアップや模索は、我孫子では演劇ワークショップに限らず主催者の努力に委ねられており、サポーター募集や活動維持を支援するしくみもない。今回のように新しい活動や交流を行う上では、それを行う者たちを支援する手立ての構築もいっそう重要となるといえよう。

【事例2：愛知県豊橋市における演劇ワークショップ】

穂の国とよはし芸術劇場プラットは、「舞台芸術のチカラを人に、まちに」の理念のもと、平成25年4月に開館した芸術文化交流施設である。汎用型の大ホールを擁する施設が多い中で、本劇場は、舞台上の生の台詞が客席まで自然に届くように設計された主ホール、幅広い文化活動が可能な小劇場空間—アートスペース—を中心に据えた、まさに「シアター」である。市民が文化交流する際の“プラット”ホームとなるべく、気軽に利用できるスペースも多数用意されている。アウトリーチ活動も大変活発に行っており、地域の小学校での演劇ワークショップ、小学校教員向けの演劇ワークショップの実施に加えて、地域の中からファシリテータを派遣できるように、ワークショップファシリテータ養成講座も開催している。今回インタビューを行った2名の専門家はこの講座の指導者であった。

目 的

児童とシニアがともに参加する学びの場を構築するにあたって、以下について示唆を得ること目的とした。

- ①必要な工夫は何か
- ②予想される問題点は何か
- ③演劇ワークショップならではの効果はあるか

方 法

演劇ワークショップを数多く手がけてこられた専門家2名へのインタビューを下記のように実施した。

インタビュアー

筆者2名。

インタビュイー

柏木陽氏（NPO 法人演劇百貨店理事長）、および、すずきこーた氏（企業組合演劇デザインギルド）。

データ収集手続き

我孫子の事例同様、ICレコーダー（SONY ICD-UX544F）に録音した。

場所

穂の国とよはし芸術劇場「プラット」。

時期

2015年8月。

結 果

インタビューは約80分かけて行われた。インタビュアーが投げかけた問いを小見出しとして掲げて、下記に提示した。

「シニアと児童がともに参加する演劇ワークショップ」からまず連想することは

こーた³氏：子どもたちがいい子でいるようなことをしてしまうだろうと思う。子どもは突拍子もないことを言うてくるから、それをどうするか。子どもはそういうところでエネ

ギーを発散すると思うから。それをオーケーと言えればまだよいのだけれど、シニアの人がずっとつきあっていれば疲れてしまう。

「お年寄りは大切にしましょう」ということを普通に言われているので、子どもが自分でやりたいと思ったことはまずやることはないだろうなと思ってしまう。それは子どもとしてすごく楽しいことではないのかなと思ってしまう。

柏木氏：最初から最後まで一緒にいなくてもいいのかなと思う。シニアの人が作った演劇を子どもにみに来てもらって、その一部を子どもと一緒に作るとか。シニアと幼稚園児だとまだうまくいくと思うのだけれど。お年寄りはすべからく子どもにやらせようとする。子どもがいると自分でやらなくなる。ひいてしまう。

子どもの自発的参加を促すにはどうしたらよいか

こーた氏：シニアの人ができる（得意な）ことをしてもらえばよいのではないかな。子どもは、おばあちゃんが折り紙を折っていたら来ると思う。来いという来ないのだけれど。ちょっとしか来ないかもしれないけど、その子にとっては「今日はおばあちゃんと折り紙折った」と思うのでは。

柏木氏：ボランティア同士がお茶飲んだり、囲碁うったりできる場で、サロンと子どもの居場所が同時並行であるとか、そういうのでないと厳しいのではないかな。

何か教えなければと気負ってしまうシニアに対しては

こーた氏：（シニアの人が子どもに何かを教え込もうとしてしまうとしたら）それは、この場をどんな場にしたいかをちゃんと伝えていないからではないかな。

柏木氏：「あなたたちをお願いしていることはこういうことですよ」ということを伝えることが必要。そういう意味では、シニア層に対する研修をきちんとした方がよい。場を育てるといことは本当に重要。その場に対する信頼感が落ちていると、どんなに面白い人が来ても子どもは来ない。かなり高い割合で場の信頼性を維持しないと難しい。ボランティアの人を募って、その人たちにお任せするのではなく、誰かが責任をもってその場を見守っていくことが必要だと思う。

こーた氏：やったことが面白かったのか、場の作り方がよかったのか（は別のことということ）がわからないといけない。

柏木氏：（ボランティアの）何とかさんが来る日というのはよいのだけれど、何とかさん以外は来ないというのをやめればいい。他の人もきていい。なんとなくわいわいやる。それで、（シニアの人は子どもに）「来い」とは言わない。（シニアの人が得意なことを）「こま」とか「囲碁」とか札をつけておいて、（子どもに）呼ばれたら行く。あくまでリアクションだけ。ここ

でお茶飲んででもいい、安全だけは気をつけてあげてね、もし教えてと言われたら教えてやって、と伝える。

シニアのボランティアを増やしていくにはどうしたらよいか

柏木氏：いい方向に向かっている人が何しているかを広報する。そういう場にしていきましようというって、そういう人の仲間を増やしていく。そういうふうにしていく機会を作るのはいい。そのために、専門家の演劇ワークショップをやるというのはいいかもしれない。そのワークショップでは、子どもはいなくてもいい。大人だけのワークショップで、どういうふうにすると楽しいか、見守るってどういうことかを体験してもらう。

こーた氏：やってはいけないことを言うより、上手くいっていることを押していく方がいい。

シニアの研修で行うべきことは何か

柏木氏：(子どもの見守りボランティアだと言われると)「何かをしなくてはいけない」と強く思いすぎる。見守るのではなく、捕まえにいこうとしてしまう。「あなたはそこにいればいい」ということをわかってもらわないと。「しなくてはいけない」、これもある種の不安。その不安をとってあげる。難しいことを考えなくてもいいと思えば、(シニアの人も)そこに行く、行けるかなと思ってくれるのではないか。

逆に「(自分は)子どものことは知っている」と思っている場合、(そのことの方が)わかっていないかもしれない。こういう未知と既知のおきかえを意識してもらうとか、そういうことのためには演劇ワークショップは有効かもしれない。見守るために特化したプログラムがあるわけではないが。

シニアにとっての演劇ワークショップとはどのようなものになりうるのか

柏木氏：小学生は鬼ごっこ、かくれんぼ。高齢者はじっくりとした話し合い、軽い運動を好む。お名前と住んでいる場所についてたくさん聞くとか、アクティブに動くことは避けようとか。

(その際) どういう場を求めていくのか。たとえば、劇場でやるとすれば劇場に来られる層が対象になる。次の(年齢)層だと、デイケアだったり、ホームだったり。どの層に向けて何をするかによって、かなり変わってくると思う。

あんまり新しいことよりは、自分に近いことをやった方が認知機能を高めるといふ知見もあるから、そうなってくると、演劇の人間でなくてもできる。長期間生活基盤を共有している人の方がいいと思う。

演劇ワークショップならではの効果とは何か

柏木氏：(たとえば、介護福祉士と演劇家との違いは)リアクションだと思う。お年寄りの

人が歌を歌ったとする。そうすると、介護福祉士さんは「お上手ですね」、僕らは「そんな歌、知ってんですか。上手っすね」と言う。介護士さんでも場をうまく作っている人はリアクションが違うと思う。大概の人は自分の業務に追われているから、おばあさんと話さなきゃとは思っていないのでは。しゃべる気になる、しゃべる気を起こすためには、リアクションが大事。そうすると、(高齢者の人は)言わなくていいことまでしゃべる。

こ一た氏：(ふだんは)聞かないからね。

柏木氏：(ある施設で)ざるを回すワークをやった。ざるが回ってきたら何かやるというものなのだが、あるおばあさんは、後の方で回ってきたからやることなく。そうしたら、そのおばあさんが立ち上がって踊り始めた。「おばあちゃん、立てたの!？」ってみんながびっくりして(笑)。普段は促しがないからね。おばあさんは「みんなが(車いすを)押してくれるから」と(笑)。

こ一た氏：(演劇家はなぜこの促しができるのかという問いに)なぜ(普通の人は)できないかではなくて、どうしてやらないの?と思う。

柏木氏：(となると、たとえば医療者はみんな演劇の訓練を受けた方がいいのかという問いに)いや、他にやることがあるから。(患者さんがやる気になってくれなくて、せっかくの知識や技術が生かせないという院生がいたがという問いかけに)大学院くらいでやるのはよいかもれない。

考 察

両氏が共通して強調した点は、学びの場でどのような活動をするかということ以前に、その場をどのように設定するか、そして、それを参加者にどのように伝えるかが非常に重要だということである。

たとえば、あびっ子のような場でシニアのボランティアに子どもの「見守り」をお願いしたい場合、「見守ってください」と言語的に依頼するとか、「見守りボランティア」という名称だけで伝わるだろうと思ってしまうのではなく、「(子どもを)見守る」行動が促されるような場をうまく設定することが必要だというのである。また、ただ「そこに居る」こと、子どもに対して積極的には「何もしない」ことから心理的な報酬あるいはその予期を得ることは容易ではない。そこで、子どもの存在とは独立に「そこに居る」意味をその場に付与し、そこで過ごしてみたくなる環境をつくる(たとえば、サロンを設定するというような形で「演出」する)ことが提案された。

さらに「子どもを見守る」とはどういうことか、なぜそのようにすることが必要なのか、そのようにすることで子どもや自分はどのような時間を過ごすことになるのかを、体験的に理解してもらうことが必要だということが述べられた。そのために、シニアボランティアに対する研修として演劇ワークショップを実施することは有効であろうということが述べられた。

というのは、場をうまく設定できたとしても、その場の意味は、アフォーダンスと言えるほど知覚的・限定的なものではなく多様であるため、すべての参加者がその場で期待される行動を行い、かつ、継続的に参加したくなるとは限らない。そこで、あらかじめ参加者の行動のレパートリーの中から期待される行動群を活性化するということだろうか。演劇ワークショップの中では“プレイ”することを通して、楽しい、「またやりたい」と思うこと、そのような活動を促す他者の行動はどのようなものだったかを直接体験できる。シニアにとってそれは、「子ども」という他者の体験を共感的に体験することであり、また、未知だと思い込んでいた未来の自分の役割（見守ること）を先行的に体験するということになる。

両氏の話に関してもう1つ特筆すべきなのは、我孫子の事例との視点の違いである。我孫子の事例では、あびっ子という既成の場をそのまま利用して、その中で児童とシニアが参加する演劇ワークショップが実施された。しかし、豊橋の専門家が提示したのは、世代間交流を行う場をいわば演劇の舞台としてとらえ、参加者をプレイヤーとしてとらえるメタ的な視点であった。つまり、演劇家にとってまなびの場で行われる活動は、演劇ワークショップでよく行われるコミュニケーション・ゲームだったり、演劇づくりであったりする必要は必ずしもなく、楽しく放課後を過ごす子どもとそれを見守るシニアが、それぞれの役割を十全に生きられるようなしなやかな準備するとともに、参加者がもっともその場をよく生きられるような身体を準備する、それこそが演劇的であるということではないだろうか。

ファシリテータ養成講座の中でも、両氏はよく「何をやってもいいんだよ」と言われるため、第二筆者も含めた受講生は戸惑ってしまうのだが、場を設定し、その場を十全に生きられるような活動を選択して、参加者に働きかけることが演劇ワークショップだとすれば、確かにそこで行われる活動は何であってよいと言えよう。事実、冒頭で紹介した「ワークショップ縁日」で用意された出し物も、演劇ワークショップとは限らず、紙ふぶきを飛ばしたり（図4上）、すごろくをしたり（図4下）と、一見演劇とは関係なさそうなものばかりである。しかし、こた氏のインタビューにもあったとおり、「場を設定すること」と「そこで行う活動」とは関係はあるものの別物であり、前者はなかなか見えづらいという点で、両者を分けて考える事は大変重要なのであろう。

ちなみに、冒頭で紹介した「ワークショップ縁日」は、この養成講座（前期）の成果として、

子どもたちが夏休みの最後に思い切り遊べるワークショップを企画、運営するというものであり、2015年夏が2回目である。この養成講座には、大学生からシニアまで、幅広い年齢層が参加している。つまり、「ワークショップ縁日」を含む養成講座の受講生は、シニアには限らないだけでなく、あくまでワークショップの企画、運営を学ぶ側として自発的に参加している。比較的年配の参加者も数名いるが、参加動機を聞いてみたところ「面白そうだから」「今までと違う自分になりたいと思って」等、年齢に限定されない答えが返ってきた。男性のシニアからは「子どもとどう接したらよいか戸惑った」という声が聞かれたものの、「このように遊んだらいい」「こう遊ぶべき」と指導する場面はほとんど見られなかった。これは、今回インタビューを行った専門家による演劇ワークショップに参加する中で、受講生としてまずは自ら遊ぶことを体験し、その楽しさを引き出すことばや仕草をお互いに経験したことが大きい。この点でも、シニアボランティアへの研修として演劇ワークショップを行うことの有効性は示唆されたといえよう。



図4 豊橋で行われたワークショップ縁日の様子（プラット提供）

総合考察

世代間交流に貢献する演劇ならではの可能性について

我孫子の事例では、日頃から子どもたちの支援を積極的に行っているシニアボランティアが対象だったこともあり、「何かしなければ」「年長者として指導しなければ」という意識が強かったこと、一方で、「待った方がよいのか」という気づき、迷いがあったことも報告された。これはまさに、豊橋の事例で専門家が予想した問題であり、世代間交流の場を設定する段階からプログラムは始まっているということを示している。

事業そのものがすでに始まっている場合は、我孫子のシニアボランティアからも要請があったように、その場の意味、自分たちに期待されていることの意味を演劇ワークショップで体感してもらうことは十分に可能であることが豊橋の事例から示唆された。

演劇的な視点で場を構成し、活動内容を選択することに成功した場合、「子どもには何か教えなくてははいけない」とか「お年寄りの言うことは聞かなくてははいけない」といった思い込みから自由になり、子どもは子どもらしさを維持したまま、時々シニアに教えを乞い、シニアも無理せず、できる範囲で子どもの役に立つことができるように思われる。無理せず、それぞれの楽しさを追求しつつ、ときどき他者の役に立つ。これは何より活動の維持・継続を助ける要因になるのではないだろうか。

見守り、見守られる関係は、被受容感を高めるであろうし、ときどきでも他者の役に立つ経験は自己効力感を高めるきっかけにもなろう。長期にわたってこのような関係が維持されれば、祖父母との交流が多かった子どもたちと同様、肯定的な高齢者感を培う（中野，1991：中野・冷水・中谷，1994：中谷，1991：吉田・冷水，1991）こともできると考えられる。

さらに、長期に継続可能な活動ということになれば、コミュニケーションスキルそのものの洗練が期待できるのではないだろうか。たとえば、シニアに伝わりやすい話し方ができるようになる、手を貸さなくてはならない局面を予想できるようになる等である。

演劇ワークショップは、恒常的に行う活動として導入するというよりは、慣れ親しんだことばや仕草を見直し蘇生させるために、新たな場を設定するとか新しいメンバーが入る等の必要な局面で導入するのが効果的なのではないかと考えられる。

演劇ならではの可能性を進める上の課題について

最大の課題は、異なる世代の者同士がともに参加できる活動を見つけることではないか。特に、児童とシニアの場合、運動能力の違いが大きいため、この選択は非常に難しい。この点を考えると、柏木氏が提案した“サロン”のように、場所、時間、活動の一部を共有するというものや、多くの世代間交流で見られるような、教える・教えられる関係が固定した、違う立場での参加がまず候補として挙げられるのは当然である。

しかし、たとえばあびっ子のように、時間と場所についてはすでに既定のものがあり、我々に与えられた自由度は、そこで行う活動だけだとしたらどうだろうか。学校という場で、毎日行われる活動だとすれば、毎回、演劇家を招聘して演劇ワークショップを行うことは不可能である。

決められた場で、毎日習慣的に行う、しかも、専門家ではない指導員とボランティアでも可能な活動を設定する。ここにいかに演劇の可能性を活かすかということが、今後の課題であろう。

注

1. 本論では、政策的な議論の対象として客体化して言及するときには「高齢者」と、実際に活動に参加する主体としては「シニア」と表現した。
2. パコモ よく遊び、よく考える子ども達と一緒に、<http://pacomo.org/>
3. 専門家の名前表記は、講座や普段の活動で称される呼称に従った。
4. 穂の国とよはし芸術劇場「PLAT」 <http://www.toyohashi-at.jp>

文 献

- 平田オリザ・蓮行（2009）. コミュニケーション力を引き出す：演劇ワークショップのすすめ. PHP新書
藤原佳典・西真理子・渡辺直紀・李相侖・井上かず子・吉田裕人・佐久間尚子・呉田陽一・石井賢二・内田勇人・角野文彦・新開省二. (2006). 都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム—“REPRINTS”の一年間の歩みと短期的効果. 日本公衆衛生雑誌, 53, 9, 702-714.
- 神山直子・北原靖子（2015）. 放課後子ども教室における子どもの意思決定とその支援—困難を生じたエピソードの検討から— 川村学園女子大学研究年報, 印刷中.
- 加藤知佳子（2015）. 演劇ワークショップの効果について—参加者の性別および社会的スキルの自己評価による検討—. 日本教育心理学会第57回総会発表論文集, 135.
- 川人潤子・大塚泰正・甲斐田幸佐・中田光紀（2011）. 日本版 PANAS20 項目の信頼性と妥当性の検討. 広島大学心理学研究, 11, 225-240.

シニアと児童と一緒に参加する演劇ワークショップの有効性に関する検討

- 北原靖子・佐藤哲康・蓮見元子・生駒忍・川嶋健太郎 (2015). ボランティア活動継続に寄与する諸要因の検討—放課後子ども教室地域サポーターの語り事例から. 川村学園女子大学研究紀要, 26, 1, 101-118.
- 北原靖子・高橋伸子・石川真理子・坂口佳江・土田宣明・吉田甫 (2015). 高齢者学習活動に伴うコミュニケーションの特徴と機能. 日本心理学会第79回発表論文集, 313.
- 文部科学省・厚生労働省 放課後子ども総合プラン連携推進室 放課後子供教室
<http://manabi-mirai.mext.go.jp/houkago.html> (2015.10 閲覧)
- 文部科学省政策・審議会 (2015). 学校施設の在り方に関する調査研究協力者会議第17回. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shisetu/013/gijiroku/1354406.htm (2015.10 閲覧)
- 中川恵里子 (2001). 米国における世代間プログラムの成立と展開—高齢社会における家庭・青少年問題への対応と学校ボランティア—. 東京大学大学院教育研究科紀要, 41, 429-438.
- 中野いく子 (2007). 世代間交流プログラムの実践と評価. 老年社会科学, 4, 497-503.
- 中野いく子・冷水 豊・中谷陽明ほか (1994). 小学生と中学生の老人イメージ; SD法による測定と比較. 社会老年学, 39, 11-22.
- 中野いく子 (1991). 児童の老人のイメージ; SD法による測定と要因分析. 社会老年学, 34, 23-36.
- 中谷陽明 (1991). 児童の老人観: 老人観スケールによる測定と要因分析. 社会老年学, 34, 13-22.
- 七木田敦・上村眞生・岡花祈一郎・若林紀乃・松井剛太 (2007). 世代間交流が幼児・高齢者に及ぼす影響に関する実証的研究. 幼年教育研究年報, 65-71.
- Newman, S. (1997). History of Evolution of Intergenerational Programs. Newman, S., Ward, CR, Smith, TB, et al., Intergenerational Programs: Past, Present, and Future. 55-79. Taylor & Francis, Washington DC.
- 小塩真司・阿部晋吾・カトローニ ビノ. (2012). 日本版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み. パーソナリティ研究, 21, 1, 40-52.
- 谷井淳一・大谷尚・無藤隆・杉森伸吉・山川法子・坂本将暢 (2009). 子ども対象の表現活動効果測定尺度の作成と尺度を用いての演劇ワークショップの評価. ルーテル学院研究紀要, テオロギア・ディアコニア 43, 49-62.
- 藤後悦子 (2012). 中学生のナーチュランスを形成する発達教育プログラム. 風間書房.
- 内田勇人 (2012). シニアボランティアによる小学校教育支援活動. 草野篤子・内田勇人・溝邊和成・吉津晶子 (編著) 多様化社会をつむぐ世代間交流-次世代への『いのち』の連鎖をつなぐ. 三学出版, 12, 134-145.
- 吉田純子・冷水 豊 (1991). 児童と老人の交流. 社会老年学, 34, 3-12.

謝 辞

我孫子調査に全面的にご協力頂きましたNPO法人パコモ代表の五十嵐みほ氏と副代表海老原直矢氏, ワークショップをコーディネートしたドラマ・セラピストBryn Jones氏, 演劇ファシリテータJen Camillin氏, および, 活動場所提供と調査にご協力くださいました我孫子市並木小学校あびっ子クラブに御礼申し上げます。

また, インタビューをお引き受けくださったNPO法人演劇百貨店の柏木陽氏, 企業組合演劇デザインギルドのすずきこーた氏, および, 場所や写真の提供に関して便宜をはかってくださいました穂の国とよ

北原靖子・加藤知佳子

はし芸術劇場「プラット」の吉川剛史氏に深謝申し上げます。

付 記

本研究の実施に当たっては、平成 27 年度お茶の水学術事業会の助成を受けた。